

平家物語と修羅能について (三)

On the tales of heike and Shura-noh

三 谷 幸 子

平家物語と修羅能について (一) (二) にひき続いての発表である。

さきに、平家物語(源平盛衰記を含む)を素材とする修羅物・略修羅物の能二十六曲のうち、鬼畜をシテとする「鶴」「羅生門」の二曲を省いた二十四曲について、シテとして登場する人物を、桓武平氏・平家の家臣・源氏の武将たち・源氏の系流でありながら平氏に仕へた者・平家物語に登場するが源氏平氏に属さない者に分類して、まず、桓武平氏の平忠度・平知盛・平通盛について考察を加えたので、この度は、桓武平氏における平経正・平敦盛・平清経について述べたい。

出典の平家物語は富倉徳次郎著「平家物語全注釈」(角川書店刊)により、能楽については「大成版観世流」の謡本に拠った。

平 経 正

父は平忠盛の三男、すなわち清盛の弟にあたり、正三位参議修理大夫経盛である。経正は経盛の長子として生を享け、琵琶をよくし、和

平家物語と修羅能について (三)

歌にも長じていた。平家物語巻七・経正都落の段に、経正の若き日の事を「八歳の時参り始め候て、十三で元服仕り候ひしまでは、相勞る事の候はんより外は、あからさまにも御前を立ち去る事も候はざりに」とあるように、仁和寺の御室(京都市右京区にある真言宗の名刹。延喜三年(九〇三)宇多天皇の建立で、それ以来代々皇子・皇孫が法務を執られたので御室おむろと称し、また、その法親王をも「御室」と称した。)の御所に童形どうぎょう(貴族の子弟で学問・作法見習いのために大寺に入って特定の僧に近侍し、僧房に起居を共にする少年)として、病の床にでもつかない限り、少しの間もお前を離れずお仕えした。経正が若き日にお仕えしたのは、第五代覚性法親王(鳥羽院第五皇子紫金台御室である。嘉応元年(一一六九)十二月薨せられた)である。経正が都落ちの折に「青山」の琵琶を返し納めたのは、第六代守覚法親王(北院御室・御白河院第四皇子)である。第六代守覚法親王もすでに保元元年(一一五六)に仁和寺に入室しているので、経正は守覚法親王にも接することがあったと思われる。

なお、この法親王が琵琶の道に優れていたことは「胡琴教録」に二条院の時、この御室に琵琶のことに付いてお尋ねがあったことが記されているので知られる。

その後、経正は皇后宮亮・但馬守となったが、寿永三年(一一八四)二月七日、一の谷合戦に敗れて助け舟に乘ろうと汀の方に落ち行くところを、河越小太郎重房の手勢に包囲されて討死した。没年令は記されていないが、弟敦盛は生年十七才で討死と記されているので二十才前後と思われる。

平家物語において経正が登場するのは次の各項である。

卷七 清水冠者 副將軍として木曾冠者義仲を追討し、その後、兵衛佐頼朝を討つために北陸道に向かう。

副將軍として近江国塩津・貝津にひかえている時、

卷七 竹生嶋詣

小舟に乗り竹生嶋に渡る。居待月の出る頃、経正が琵琶を奏すると、明神は感應に堪えず経正の袖の上に白竜となって現れる。

卷七 経正都落 都を落ちるに際して仁和寺に立ち寄り、琵琶「青山」を守覚法親王に手渡す。

山」を守覚法親王に手渡す。

卷七 池殿都落

東国・北国の度々の戦に討ち洩らされて、わづかに残る平家の公達の西国に落ちゆく中に経正の姿があった。

卷八 小田巻

寿永二年九月十三日の夜、都を思い出して、薩摩守忠度、父修理大夫経盛らと共に月見の和歌を詠む。

卷九 武蔵守最後 助け舟に乘ろうとすると、河越小太郎重房の手勢に囲まれて討たれる。

経正が琵琶の名手であったことは、「残夜抄」(近衛家基著)琵琶・箏についての項に「つねまさとて、いみじきすき人ありき。それがしうとめて能登あまといふことびはの上手ありき」とあり、この能登尼の流れとすると、大納言経信の流れで、その音楽家としての流派は妙音院太政大臣師長と同系統である。

経正の琵琶が竹生嶋明神をして感應に堪えられなくした程の名手であったことは、平家物語卷七・竹生嶋詣の次の文に示されている。

経正明神の御前(ごまへ)に、いい給ひつづ——中略——しばらく法施(ほっせ)せ給ふに、やうやう日暮れ、居待(ゐまち)の月さし出でて、海上(かみうみ)も照り渡り、社壇(じやだん)もいよいよ輝きて、まことに面白かりければ、常住(じやうぢゆう)の僧共(そうどう)「これは聞ゆる御事なり」とて、御琵琶を参らせたりければ、経正これを弾き給ふに、上玄(じやうげん)・石上の秘曲(ひまがせのひまがせ)には宮のうちも澄み渡り、明神感應(めいじんかんとん)に堪えずして、経正の袖の上に白竜(びやくりゆう)現じて見え給へり。忝(かたじけなく)くうれしさの余りに、泣く泣くかうぞ思ひ続け給ふ。

ちはやぶる神に祈りのかなへばやしるくも色のあらはれにけりされば朝(あした)の怨敵(うらたけ)を目の前にて平らげ、凶徒(きょうと)を只今攻め落さんは疑ひなしと悦んで、又舟にとりつて竹生嶋をぞ出でられる。

経正のこの願(ねが)いもむなしく俱利伽羅谷(くりにがら)の合戦などで、手傷い敗北をうけた平氏は、主上の都落ちに続いて一族の者皆ひき続き都落ちとなるのである。その「落ちゆく平家は誰々ぞ」の中に経正の姿もあった。歌人忠度叔父が都落ちの折に五条三位俊成卿に歌をたくした別れと

ともに、経正が都落ちの時仁和寺の御室に琵琶「青山」を残して去りゆくさまはまことにあわれである。「平家正節」では、「青山の沙汰」という一句として、特に詳しく記されている。この「青山」の琵琶については、平家物語巻七・経正都落の項に次のように記されている。彼の青山と申す御琵琶は、昔仁明天皇の御宇、嘉祥三年の春、掃部頭貞敏渡唐の時、大唐の琵琶の博士廉妻夫に逢ひ、三曲を伝へて帰朝せしに、玄上・師子丸・青山、三面の琵琶を相伝して渡りけるが、竜神や惜しみ給ひけん、浪風荒く立ちければ、師子丸をば海底に沈め、今二面の琵琶を渡して、吾が朝の御門の御宝とす。村上上の聖代応和の頃ほひ、三五夜中新月白く冴え、涼風颯颯たりし夜半ばに、御門清涼殿にして玄上をぞ遊ばされける時に、影の如くなる者御前に参じて、優にけだかき声にて唱歌を目出たう仕る。御門御琵琶をさしおかせ給ひて、「抑汝はいかなる者ぞ。いづくより来たれる者ぞ」と御尋ねあれば、「これは昔貞敏に三曲を伝へ候ひし大唐の琵琶の博士廉妻夫と申す者で候ふが、三曲の中秘曲を一曲残せるによつて、魔道に沈淪仕つて候。いま御琵琶の撓音妙に聞え待る間、参人仕る処なり。願はくは此の曲を君に授け奉り、仏果菩提を証すべき」由申して、御前に立てられたる青山を取り、転手をねじて秘曲を君に授け奉る。三曲の中上玄・石上これなり。其の後には君も臣も恐れさせ給ひて、此の琵琶を遊ばし弾く事もせさせ給はず。御室へ参らせられたりけるを、経正の幼少の時、御最愛の童形たるによつて下し預かりたりけるとかや。甲は紫藤の甲、夏山の緑の木の間より、有明の月の出づるを撓面にかかれたりける故にこそ、

青山とはつけられたれ。玄上にも相劣らぬ希代の名物なりけり。

以上の文にあるように、この「青山」は経正が幼少の時御最愛の稚児であったために御下賜あったものである。「この経正十七の年宇佐の勅使を承つて下られけるに、其の時青山を賜つて宇佐へ参り、御殿に向かひ奉り秘曲を引き給ひしかば、いつ聞き馴れたる事は無けれども、供の宮人おしなべて、緑衣の袖をぞ絞りける。聞き知らぬ奴までも急雨とはまがはじな。目出たかりし事共なり」とあるように、宇佐の勅使(天皇即位の報告に和氣氏の人を宇佐八幡宮に遣わし、それより三年に一度勅使を遣わす例であったが、男山八幡宮鎮座の後、宇佐へは一代に一度勅使が立つ例となつた。勅使は五位の殿上人が向かう定めである。)として、宇佐八幡への奉幣の折には、「青山」の琵琶をもって、まことにみごとな樂を奏した。その後経正は、皇后宮亮・但馬守・正四位となつたが、平家一門の運命も尽き都を去るにあつて、幼少の頃、仁和寺の御室(覺性法親王)の御所での稚児の頃が懐しく、名残り惜しく思い出され、別れの挨拶に立ち寄るのである。その時経正は甲冑を身にまとい、弓矢を帯したままで守覚法親王にゆるされ広びさしに上つた。そこで供につれていた藤兵衛有教を召し、赤地の錦の袋に入れた御琵琶を受け取り、御前に置いて申されるには、「先年下し預かつて候ひし青山持たせて参つて候。余りに名残は惜しう候へども、さしもの名物を田舎の塵になさん事、口惜しう候。若し不思議に運命開けて、又都へ立ち歸る事候はば、其の時こそ猶下し預かり候はめ」と泣く泣く申されたので、法親王も心うたれて、次の歌一首を書いて下された。

あかずして別るる君が名残をば後の形見につつみてぞおく
お靨をいただいたので、経正も御返歌を詠んだ。

呉竹の笥の水はかはれどもなほすみあかぬ宮のうちかな

さて、お暇を申して退出なさったが、五・六人の人たちは名残りを惜しんで涙を流す中でも、経正の幼少の頃、小法師（受戒後十夏未満でまだ師を離れない者）で、ともに仁和寺の御前に仕えた大納言法印行慶は桂川のとおりまで見送って、

あはれなり老木若木も山桜おくれ先だち花は残らじ

経正の返事には

旅衣よなよな袖をかた敷きて思へばわれは遠くゆきなん

やがて、家来に巻いて持たせてあった赤旗をさっとさし上げて、あちらこちらに馬を控えて待っていた侍たちと共に、百騎ばかりとなって、まもなく行幸の御興に追いつき奉ったのである。

この大納言法印行慶の父は葉室大納言藤原高藤の裔で藤原顯頼の子、成頼入道の兄で養父。葉室家の菩提寺勸修寺は真言宗に属し、仁和寺とは交渉があったので、葉室家の人物で仁和寺に入る者があっても不思議ではない。

能では、この行慶がワキとして登場し、僧都が経正戦死の報せを聞き、かの「青山」を仏前に据え置き、管絃講を催して申している、その夜更けに、経正の幽霊が現れて、行慶と詞をかはしたので、おのの楽器を調べて糸竹の手向（管絃講を勧めていると、経正の幽霊が燈火の影に人にはみえないけれども琵琶をとり、みずから弾じて娑婆の管絃の夜遊を心楽しんでいたが、やがて「曠志の猛火は雨となって身に

かかれば拂ふ劍は他を悩まし我と身を斬る。」と謡本にあるように、曠志の心は、仏説に其の者の身を焼く猛火だとたとえられるが、突然修羅の苦患におそれ、他を悩まし、我と身を斬り、紅波（流るる血の波）は、かえって身を焼く猛火となる。経正の亡霊の姿は、見えつ隠れつしてその姿をあらわにしない。そして、ワキの行慶僧都が「前に見えつる人影の、なほ現るるは経正か」と声をかけると「あら恥かしや我が姿。はや人々に見えけるぞや、あの燈火を消し給へとよ」と経正の亡霊はこの世に姿を現わして僧都に回向を願わないばかりか「恥づかしや人には見えぬものを。あの燈火を消さんとて、燈火を嵐と共に吹き消して、暗きまぎれより魄霊は失せにけり」と、修羅道に堕ちた自分には見えぬであろうと思つて姿をあらわしたことを恥づかしいと思ひ消え失せてしまふ。恥じらいを失っていない貴公子のさわやかな面かけがここにある。そして、「青山」の琵琶を弾じている経正の亡霊は、「第一第二の絃は索々として秋の風。松を払つて疎韻落つ。第三第四の絃は冷々として夜の鶴の子を憶うて籠の中に鳴く。鶉も心して夜遊の別れとどめよ。一声の鳳管は秋奏嶺の雲を動かせば、鳳凰もこれに愛でて、梧桐に飛び下りて翼を連ねて舞い遊べば、律呂の声々に情声に発す。声交をなす事も昔を返す舞の袖。衣笠山も近かりき。面白の夜遊やあら面白の夜遊や」と夜遊のおもしろさに我を忘れて昔をなつかしみ、やがて、その楽しい夜遊の興をも立ち切つてあの世に去つてゆかねばならぬ愛惜の情は、芸術の真の心に触れることを得た者のみの、そして、妙なる澄んだ音色の中に我を忘れること出来る者の深い味わいであり、悲しみでもある。まさに、能のもつ

幽玄の境を表現するにふさわしい曲趣といえよう。

平家物語に描かれた経正は、「青山」の琵琶をかなでて竹生嶋明神を感応せしめ、落ち行く平家と運命を共にするにあたって琵琶「青山」を後の形見に残してゆくほどの芸術味溢れる貴公子である。

能に描かれた経正も、修羅物に属しているが、修羅の地獄の沙汰を演じる亡霊ではなく、琵琶の音色を思わせるすばらしい詞章と曲節の優雅さは、格調ある芸術の世界のものであり、修羅物である故に小品であるが、夜遊のおもしろさと、シテが優美を知る貴公子であることによつて、幽玄味豊かなものとなっている。

シテの経正の面は「中将又ハ今若、童子、慈童ニモ」と謡本に示されているように、王朝時代の公卿の公達を表わした中将から、少年童子までの面がゆるされている。扇も「修羅扇」のほか「敦盛扇」が使用され、黒骨に妻紅、金地に日輪が中央に輝き、周囲に介藻を散りばめたもので、経正・敦盛・知章・朝長などの公達物にのみ許されたものである。

平 敦 盛

平敦盛の長兄は、前述の経正であり、次兄経俊に続いて嘉応元年（一一六九）経盛の第三子として誕生し、無官大夫と呼ばれた。大夫は五位を云うが、なぜ無官であったかは平家物語では触れていない。しかし、史実のほどは詳かでないが、近世の浄瑠璃作家の手によって書かれたところによると、敦盛は御白河法皇の御落胤であるというの

平家物語と修羅能について (三)

である。それは享保十五年十一月十五日竹本座で上演された俗に「扇谷熊谷」と呼ばれる「須磨都源平蹶躄」（文耕堂及び長谷川千四の合作）に依據して書かれたと言われている。「一谷嫩軍記」である。作者としては浅田一鳥・浪岡鯨児・並木正三・難波三藏・豊竹甚六の他に、この作の三段目を絶筆とした物語者並木宗輔である、これは宝暦元年十二月十一日豊竹座で初演されたものであるが、堀川御所で義経が六称太に桜の枝を渡すと同時に、熊谷真実には弁慶の書いた「此花江南所無也。一枝折盗の輩に於ては、天永紅葉の例に任せ、一枝を伐らば一指を剪るべし」という御札を渡したところが熊谷はこれを謎解きして、「院の御落胤である無官大夫敦盛を助けよ。一子を切らんとするならば一子を切れ」と解して読んだ。だから、彼は須磨の浦で敦盛を討つと見せて、その日初陣の一子小次郎真家を敦盛と味方に見せかけて首を討ち、陣屋で義経の前に「御批判如何に」と首実験にさし出すのである。有朋堂文庫（大正十五年十月刊）海音半二、出雲宗輔傑作集によれば、一谷嫩軍記の第一場において、玉織姫と敦盛の婚儀に先だち、父経盛は改まって敦盛に「口外へ出さねば知人有害じ。そも此敦盛卿は、我子にて我子にあらず。元此みだい藤の方は、法皇に宮仕へ、御寵愛ふかうして、御胤を身にやどせしが、人の妬みの強ければと、先祖平の忠盛へ、白河院より下されし祇園女御の例に任せ、懐胎の身を其俣、某が宿が妻に給はりて出生有し此敦盛、我子として育てしが、院参の折ごとに、人なき間にはいもが子の、歌によそへて御尋ね浅からぬ御いつくしみ。かく由緒有敦盛なれば、いかなる高位高官も、望の如く成るべけれ共、官位を受けては臣下の列、重て帝位を

ふむ事叶はず、かく御寵愛ふかき敦盛、まさかの時は春宮にも立給はん御心やと、叡慮をはかり今日迄熊と官位の望もせず、扱こそ無官の太夫と呼ばせしぞや。斯物語る上からは、其土器は天盃同然、流を汲んで玉折姫、三々九度を納むべし」と語っている。義理人情を重んじ、忠君の思想にもとづいた江戸時代にふさわしい脚本である。

平家物語の中に敦盛が登場するのは次の項である。

巻七 池殿都落

東国北国度々の戦にこの二三ヶ年が間討ち洩らされてわずかに残る落ち行く平氏の中に太夫敦盛の姿があった。

巻九 敦盛最後

一の谷の軍に敗れ、助け舟に乘ろうと海へうち入ったところ熊谷次郎真実に呼び返されて、ついに討ちとられた。

巻九 武蔵殿最後

一の谷で討たれた人たちの中に経盛の嫡子皇后官亮経正・弟若狭守経俊・其弟太夫敦盛の三人の兄弟の名が挙げられている。

兄の経正が琵琶の名手であったのに対して、笛をよくした敦盛は十六才の若さで、源氏方の坂東一の剛の者といわれる熊谷次郎真実に頸を打たれて果てる。その折のさまを平家物語巻九・敦盛最後の本文では次のように記している。

取って押さへて頸をかかんと内甲を押し仰げて見れば、年の齡十六七ばかんなるが、薄化粧して金黒なり、我が子の小次郎が齡程にて容顔誠に美麗なりければ、何くに刀を立つべしとも覚えず。熊谷「抑いかなる人にてましまし候ふやらん、名乗らせ給へ助け参ら

せん」と申しければ、一中略一熊谷涙をはらはらと流いて「助け参らせんと存じ候へども、御方の兵共、雲霞の如く候へば、よものがし参らせ候はじ。同じくは真実が手につけて奉って、後の御孝養こそ仕り候はめ」と申しければ「ただ何様にもとうとう頸をとれ」とぞ宣ひける。熊谷あまりにいとほしくて、何くに刀を立つべしとも覚えず、目もくれ心も消えはてて前後不覚におぼえけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣く泣く頸を掻いてんげる。「あはれ弓矢とる身程口惜しかりける事はなし。武芸の家に生まれずば、何とてか唯今かかる憂目をばみるべき、情なうも討ち奉るものかな」とかきくどき、袖を顔に押し当ててさめざめと泣きいたる。ややあって、鎧直垂をとって、頸をつつまんとしけるに、錦の袋に入れたりける笛をぞ腰にさされたる。「あないとほし、此の曉城の内にて管絃し給ひつるは、此の人人にておはしけり、当時御方に東国より上つたる勢何万騎あるらめども、軍の陣へ笛持つ人はよもあらじ、上臈は猶もやさしかりけり」とて、是を大將軍の見参に入れたりければ、見る人涙を流しけり、

後に聞けば、修理太夫経盛の子息太夫敦盛とて生年十七にぞなられりける。それよりしてこそ熊谷が発心の心は進みけれ一後略一「源平闘諍録」では熊谷次郎に討たれたのは業盛となっているが、熊谷は業盛の頸をとってからは、味方の者の逢うごとに、「門脇殿の三男蔵人太夫とて十六歳に成り給ふを討つたるぞや」と泣いて言つたとあって、一の谷で門脇殿の若い公達を討つたということが、熊谷の出家と結びつけて伝えられている。しかも、業盛の持っていた楽器は

「漢竹の簞杖」で、別に長歌を書いた小巻物を持っていたとしている。しかし、廷慶本・長門本・源平盛衰記では、修理大夫経盛の末子、無官太夫敦盛と門脇平中納言教盛の第三子業盛の混乱はなくなつて、さらに、敦盛を討った後に、熊谷が敦盛の頸に篋と巻物を添え「御孝養候べし」との書状をそえて、屋島にいる敦盛の父、修理大夫経盛に送つた話が付いており、真実の書状と、それに対する経盛の返状が載せられている。そして、その手紙のあとで、敦盛説話全体について、是ヨリシテゾ熊谷ノ発心ノ心ヲバオコシケル。法然上人ニ相奉テ出家シテ法名蓮性ト申ケル、高野ノ蓮花谷ニ住シテ敦盛ノ後世ヲゾ訪ケル、難有ケル善知識カナトゾ人申ケル。と結んでいる。

熊谷の出家のことについては、平家物語巻九敦盛最後の段に「名乗らずとも、頸をとつて人に問へ、見知らうずる」と言つて名乗らなかつた小公子が、「後に聞けば、修理大夫経盛の子息敦盛とて、生年十七にぞなられる。それよりしてこそ、熊谷が発心の心は進みけれ」とあり、能「敦盛」においても、「さても敦盛を手を掛け申しる事、余りに御傷はしく候程に、かやうの姿となりて候」とあるように、直接出家の原因を敦盛と結びつけているが、『吾妻鏡』に見える記事が実伝であると考えられるところによると、姨母の夫と領地の境界争いの中で、頼朝の前で対決したが、頼朝から不審の点についてたびたび尋問せられたのを誤解し、遂に怒つて、西侍のみずから髪を切り出奔した時は五十二才であった。出家した彼は、やがて京都にあつて法然上人に帰依したと言われている。

これに対して、『熊谷家文書』によると、真実は『吾妻鏡』による事件よりも一年九ヶ月前に出家して「地頭僧蓮生」と署名し花押まで加えている。故に『吾妻鏡』の記事は史実ではないとする説である。出家の動機は文治三年八月十五日に鶴岡八幡宮放生会で初めて行なわれた流鏝馬において「真実が頼朝の命に従わず、不興をかつたか、または、敦盛を討つたことによるのかもしれない」と述べられている。富倉徳次郎氏は、この二説に対して「私は『熊谷家文書』の譏状が果たして偽文書でないとしたならば、真実の出家の動機はこの敦盛の事件だというよりは、宇治川の合戦、一の谷の合戦と相次ぐ戦場体験の集積によるものと考えられると思ふ」と申されているが、まことに人間が人生の転換を迫られる時、理由が一つなどということはあるまい。長い間の種々の体験の中から除々に時に感じ、頭をもたげて来た思いがその人の運命を決するのである。いづれにしろ、熊谷次郎真実が出家して法然上人とめぐり逢い、信仰者としての蓮生法師の名が世に知られていたことは容易にうなずけるのである。

能「敦盛」におけるワキが、この蓮生法師であり、敦盛を手にかけて殺した熊谷の次郎であることは前にも述べたが、しかし、今では敵味方の関係ではなく、懺悔によってその関係を清算し、京都を發つて、津の国一の谷に着き、昔の有様が今のように思い出されて深い感慨に耽けている時、笛吹く前ジテの草刈男と出逢うのである。この曲の古名を「草刈敦盛」というゆえんである。十代という短い生命を戦乱の犠牲によって散らした小公子の化身であるから、頭に霜のおく尉ではなくて、直面の若い男である。

殺した男と害された一少年の邂逅。しかも、本曲の重点は、そうした修羅の巷の外におかれ、あくまでも美の幽玄の世界にある。前段の笛ひと色のやりとりといひ、後段の生前の思い出の夜の御遊びといひ、因果はめぐり逢ひ、敵を目前にして討とうとすると、「仇をば恩にて法事の念仏して弔はるれば、終には共に生まるべき同じ蓮の蓮生法師、敵にてはなかりけり。跡弔ひて賜ひ給へ」と少年貴公子は、ここにおいて、美と信仰の合致に無限の法悦を享楽出来る心境に到達している。そして、それを助けた善知識人こそ熊谷次郎真実こと蓮生坊であったのである。「諸行は無常なり 是生滅の法なり 生滅滅し己りて 寂滅楽しひと ならず」冒頭の平家物語の偈の示すように、法悦の心境に達して成仏し、消えうせるのである。能面「敦盛」「十六」「中将」が示すように「可憐さ」と妙な笛の音に全段が幽玄味溢れるものとなっている。

この他に能では「生田敦盛」がある。黒谷の法然上人が拾った拾子が敦盛の一子であり、少年の夢中に敦盛が甲冑姿で現われ、一の谷合戦の物語をしたり、親子の対面を喜んで舞を舞ったりして睦方に回向を頼んで消え失せるという構想である。平家物語にも「敦盛最後」のことは巻九に詳しく記され、源平盛衰記にもみえているが、敦盛に遺子があったことは記されていない。

また、敦盛の持っていた笛については、平家物語・巻九の本文では「件の笛は、祖父忠盛、笛の上手にて、鳥羽院より賜はられたりしが、経盛相伝せられたりしを、敦盛器量たるによって、もたれたりけるとかや。名をば小枝とぞ申しける。狂言綺語の理と云いながら、遂に讃仏乗の因となるこそあはれなり。」と記され、能「敦盛」では「身の

業の、好ける心に寄竹の小枝蟬折様々に、笛の名は多けれども、草刈の吹く笛ならば、これも名は青葉の笛と思し召せ」と、謡本に「青葉の笛」という異名が記されている。

「小枝」については、伝承は詳らかではないが、『楽家録』巻四十一、安倍季尚編輯『音様珍器』に「左枝、太夫敦盛笛也。父平経盛黄金百両を齎して漢竹を宋に需めて、これを得たり。前天台座主明雲僧正を以て、秘密瑜伽壇に置き、七日これを加持し、以て彫らしめし笛なり。然して後、息敦盛其器量あるに因って、七歳の時これを与ふ。此の笛深更に至ってこれを奉するに其の声消倍ゆ。因って左枝と号す云々」とあるが、もとより後世の伝承であろう。この笛に人々が関心をよせ、一の谷にある須磨寺に宝蔵せられるものとして問題になったのは、十五世紀初めの頃かといわれている。それについては『当代歴史』(須磨寺の古記録によると明応七年(一四五六)の須磨寺の勸進状には「青葉の笛」の笛の由緒が書き記され、敦盛像と共に青葉の笛の展観が貴賤の人を集めたといわれている。

したがって、「青葉の笛」の名が一般に呼ばれるようになったのは江戸時代からであろう。

理在須磨浦公園のみどりの塔の前あたりに「源平史蹟戦の浜」の石碑が立てられている。また、公園のすぐ西隅に「敦盛塚」があり、梵字を刻んだ高さ三・七八メートルもある大きな五輪の塔がある。石塔は北条貞時が平家一門を供養するために弘安九年(一一八六年)建立したものとされる。また、郷土史家川辺賢武氏の昭和十六年に発表された考証研究によると、室町末期から桃山初期の造願と推定されて

いる。この塚は、かつて風雨にさらされていたのを、現今では屋根を設け、傍に「一の谷敦盛卿の墓」と記され、神戸教育委員会、須磨区役所の手が加えられている。須磨寺に詣でると、「源平の庭」がしつらえられており、敦盛と真実の像が実物大に再現されている。境内には「敦盛首洗池」「義経腰掛松」「弁慶若木の桜」その他句碑、歌碑もみられ、宝物殿には前述の青葉の笛と敦盛の木像が納められている。

平 清 経

清経は、清盛公の長子、小松の大臣重盛の三男である。左中将清経、左中将、清経中將と呼ばれていた。が、平家物語の中では、長兄の維盛などのように人物としては詳しく描かれていない。須俣合戦には見当らない。そして、平家一門の都落ちの中に、その姿を見せ、太宰府落ちの段で入水し果てる。小松殿の三男左中将清経という以外に記録はないが、『中院本』には「二十一にて波にぞ沈み給ひける」とある。また、『建礼門院右京大夫集』にも、

「うきことはさなれども、この三位中將と清経の中將と、心とかなりぬるなどさまざま人のいひあつかふにも、残りていかに心よわくやいとと思ふらむなどさまざま思へど」

とあり、右京大夫は、清経の兄資盛の愛人であるから、資盛の兄維盛の入水や弟の清経の悲しい出来事に、恋人の資盛がどんなに心細く思っているだろうと、心を傷めていることが日記に記されているので、

清経の入水は史実とみてよいと思う。

平家物語の中に清経の登場するのは次の項である。

卷六 須俣合戦

東国の源氏どもが、すでに尾張の国まで攻め上り、道を寒ぎ人を通さぬ由と美濃国の目代が申し送ってきたので、討手をつかわした。大將軍には、左兵衛督知盛、左中将清経―後略―と記されている。

卷七 維盛都落

小松三位中將維盛が夫人や御子との別れを惜しんで、天皇の御輿に遅れて仲々到着しないので、清経をはじめ兄弟六人心配して引返して来た。宗盛公をはじめとして落ち行く平家一門の人々の中に清経の姿があった。

卷七 池殿都落

卷八 大宰府落

平家は筑紫に都を定めようとしたが、緒方三郎維義の謀叛によって、とる物も取りあえず太宰府を落ち、箱崎の津へ、そして、山鹿城に籠られ、豊前国柳浦に渡られた。が、またも長門から源氏が攻め寄せるとの噂に小舟に召されて海に浮かび出られた。このような惨状の中で、平家の未来を「網にかかれる魚のごとし」と悲観した清経は、ついに入水し果てる。

平家物語では清経の入水の事を次のように記している。

小松殿の三男左中将清経は、もとより何事も深く思ひ入り給へる人にておはしけるが、月の夜心を澄まし、船の屋形に立ち出で、

横笛よこふエ音取り郎詠して遊ばれけるが、「都をば源氏が為に責め落され、鎮西をば維義が為に追い出ださる。網に懸れる魚の如し。何くへ行かば遁るべきかは。長らへ果つべき身にもあらず」として閑しづかかに経読み念仏して海にぞ沈み給ひける。

源平盛衰記・卷三十三では

左中将清経は、都を落ち給ひける時、女房をも西国へ相具し奉らんと宣いければ、年来深き契りを誥び、二心なく憑たみ憑たまれたる御中にて、女房はさもと出立ち給ひけるを、父母大いに嘯いりつつ免じ給はざりければ力及ばず、悲しみの中を別れて独り都を落ち給ひけるが、道より鬢の髪を切つて返し遣して、常は音信申さん、便の時又承る事も候へよ、などいひ送りながら、三年が程あるかなき言伝もなかりければ、女房恨み給ひて―中略―今は心替りのあればこそ三年を経る共云ふ事はなかるめ、さては形見も由なしとて、返し下し給ひけるが、左中将が柳浦に御座ありける所へ着きたり。一首の歌を副へられたり。見るからに心つくしのかみなれば、うさにぞ返す本の社に、左中将是を見給ひては、さこそ悲しく覚しけれ

この文中に「三年」とあるは誤りであろう。卷七・主上部落の段に「明くれば七月二五日なり。―中略―摂政殿も行幸に供奉くわんぷして御出なりけるが」とあり、築紫この大蔵種直が宿所から太宰府を遷幸せんけいになったのが九月の中旬、(卷八・小手巻)で、その後太宰府と落ち行き、山賀城へ、そして、柳浦へと源氏の討手におびえながら、主上を奉じて平家一門の者が落ちてゆく惨状か記されている中で、清経の入水か記されているのであるから、おそらく十月も半ばの出来事と思われるの

で、これは、「三月」の誤りであろう。

能「清経」は、以上のことから「源平盛衰記」によったと思われるが、形見の黒髪を送ったのは前述の平家物語の文では生前となっているが、原拠を多少作りかえ、船中に残し置かれた鬢の髪を形見にワキが都に持ち帰ったものとしている。

それにしても、清経の人物像については、平家物語では殆ど触れられていない。「もとより何事も深く思ひ入り給へる人にておはしけるが」と卷八、太宰府落の段で記されているのみである。思慮深く、信心の篤かった父重盛を早く失った清経には、祖父清盛のように、逞ましく行動的な面は全くない。生れながらの貴公子として育った彼はおそらく武芸に励むこともなく、清盛たちの生きて来た乱世の大革命は遠き夢となって、優雅な公卿の暮らしの中で、血生臭く、非人間的な戦争など考えてもみなかったであろう。それを、見知らぬ筑紫の国で、馬も輿もなく、土砂降りの雨の中を徒歩はだして落ちてゆく惨めさ、そして、源氏の討手に怖びえながら、席の温る間もなく小舟に揺られて、さまざま絶望の毎日に耐えられなかったであろうし、平家一門の中でも、宗盛、建礼門院徳子のように二位尼時子を生母とする人達と、重盛の系統をひく、清経兄弟との間には、しっくりしないものがあつたに違いない。清経の入水にひき続く、維盛の新宮沖での入水絶望の中で一条の光明も見出すことの出来なかつた清経の死を、世阿弥は、最愛の妻を登場させることによって、「くねる涙の手枕を、並べてふたりが逢う夜なれど怨むればひとり寝の、ふしぶしなるぞ悲しき」と、愛する故の恋しさを、一人で死出の旅に出でしまったことへ

の妻の怨めしさを先に出している。

この曲には「恋の音取」という小書がある。舞台の中には誰も登場していない。静寂の中に笛方が座をすすめて、揚幕の方に向く。やがて、手向けの笛の音のみが流れる中で、その笛の音にひかれて清経の霊が現れる。澄んだ笛の音色に酔っていると橋懸りの方に、上品な若人の面、「今若」をつけた武者姿の清経が現れ、妻の夢枕に立つのである。そこで、清経は形見の髪を返したことを咎め、妻は夫が一人で命を落としたことを怨み、互いに袂をぬらし身の不幸を歎くのであるが、やがて、清経が入水当時の事を述べる段がこの曲の中心となるのである。「何事も深く思ひ給へる人」とのみしか記されていない平家の一節を、能では、夫婦の愛の絆、平家一門の没落のしみめさ、絶望的な死、そして、弥陀の救いと、修羅ものを修羅ものらしくない人物として極めて幽玄味のあるものに演出することに成功している。敦盛や経正が「平家のまま」に演じることが可能であるのに対して、能「清経」こそは、まことに作者の演出の力になることが大きく、それだけに、能役者としては、至難の「わざ」を必要とするものであろうし、そここそ、芸能の味わいがあるのであろう。

(国文学科 専任講師)